

# モグラ びと

ニューヨーク地下生活者たち

THE MOLE PEOPLE

Jennifer Toth

ジェニファートス

渡辺 葉・訳



# ラ びと

ニューヨーク地下生活者たち

THE MOLE PEOPLE

Jennifer Toth

ジェニファース

渡辺 葉・訳



THE MOLE PEOPLE  
LIFE IN THE TUNNELS BENEATH NEW YORK CITY

by Jennifer Toth

© 1993 by Jennifer Toth

Japanese translation rights arranged  
with Chicago Review Press, Chicago  
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

モグラビと ニューヨーク地下生活者たち

一九九七年 一月三〇日 第一刷発行

一九九七年 三月一九日 第二刷発行

著者 ジェニファー・トス

訳者 渡辺 葉

装画 越澤 秀

装丁 木村裕治 間野 成

発行者 小島民雄

発行所 株式会社 集英社

一九九〇年

〒101-50 東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇

編集部 (〇三) 三三三〇一六〇九四

電話 販売部 (〇三) 三三三〇一六三九三

制作部 (〇三) 三三三〇一六〇八〇

印刷所  
製本所

図書印刷株式会社

©1997 Shueisha Printed in Japan

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送りください。送料小社負担でお取り替えいたします。  
本書の内容の一部または全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

## 目次

モグラびと——ニューヨーク地下生活者たち

はじめに

一 ねぐらを探して

二 シビル

三 マックの闘争

四 地下世界の住人たち

五 「地下都市」

六 バウワリー通り

七 ヘンリー巡査部長

八 地獄の台所  
ヘルズ・キッチン

九 トンネル・ベイビー

十 家と呼べるところ

十一 救世主のトンネル

十二 トンネル・アート

十三 地下鉄グラファイティ

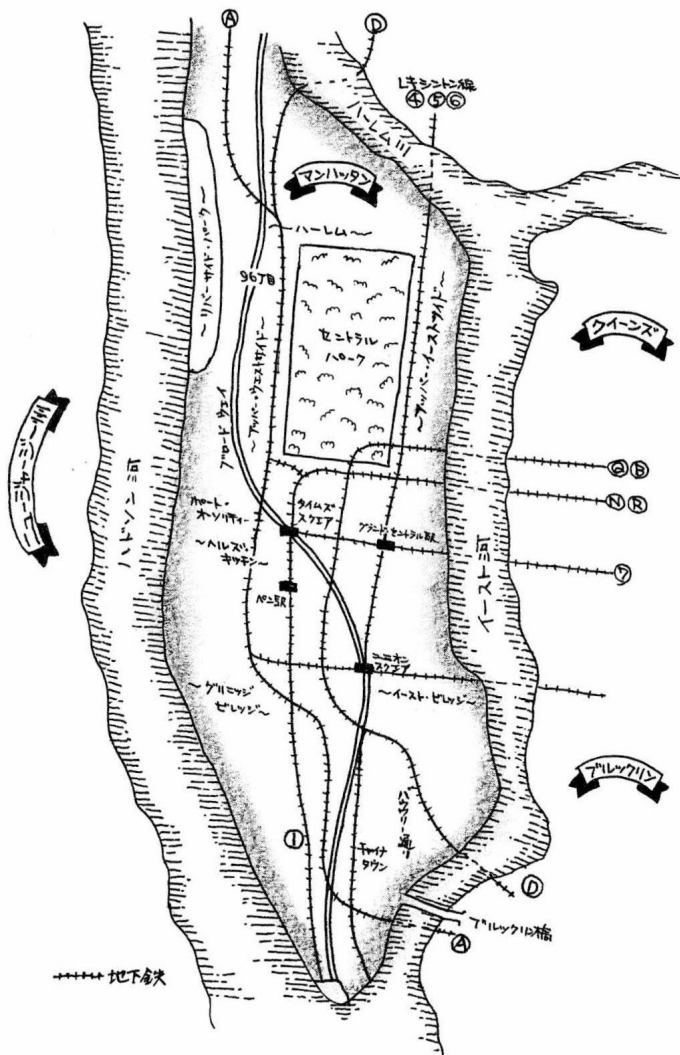
166 153 124 112 99 95 79 67 59 50 42 19 14 7

|     |                                |     |
|-----|--------------------------------|-----|
| 十四  | 少年たちの家                         | 175 |
| 十五  | 救援グループ                         | 195 |
| 十六  | 「闇の天使」を名乗る男                    | 212 |
| 十七  | さまよい人 <sup>びと</sup> たち         | 217 |
| 十八  | ハーレム・ギャング                      | 220 |
| 十九  | 地下の「市長」と会う                     | 231 |
| 二十  | 仲間 <sup>シタイ・オブ・フレンズ</sup> たちの街 | 247 |
| 二十一 | トンネルの女たち                       | 260 |
| 二十二 | ジャモールの太陽                       | 282 |
| 二十三 | 「刃 <sup>ブレッド</sup> 」と呼ばれた男     | 291 |
|     | 終わりに                           | 305 |

地下にすむということ ◆ 椎名 誠

地下から聞いてきたほんとうの話 ◆ 渡辺 葉

# MANHATTAN



モグラビと

ニューヨーク地下生活者たち



## はじめに

「モグル・ビーグル」のことを最初に耳にしたのは、十歳の友人クリスティンからだ。その頃私はコロンビア大学の大学院に在学し、ボランティアでハーレム・家庭教師プログラムに参加していた。クリスティンは私の生徒の一人で、私たちは毎週会っていた。私が算数をみてあげるかわりに、彼女はニューヨークの路上生活について教えてくれたのだ。

土曜日の午前中だった。私たちは、インターナショナル・ハウスのホールのふかふかしたソファに座って、丸い張り出し窓からリバーサイド・パークを見下ろしていた。外は寒そうでも、陽光の射し込んだ部屋は暖かく心地好い。学校の宿題に飽きたクリスティンは、何か面白いものはないかと、天井や壁の絵、磨き上げられたピアノなどを見回した。

「学校にいるジュリーっていう子ね、こういう建物じゃなくて、地下のトンネルに住んでるのよ」  
クリスティンの目はいつもの「お話」をするときのように見開かれ、興奮に輝いている。私は思わず笑ってしまった。

「本当なもの！ あのトンネルのどこかに住んでいるのよ」  
ジュリーとは友達なの？ と聞くとクリスティンは、とんでもないというように身体を震わせた。

「ジュリーには友達なんかいないの。いつも汚いし、くさいもん。ジュリーって、モグラびとなんだから」クリステインはイメージにあるモグラのまねをして目と鼻をしかめ、口の横でひげのつもりの手をひらひらさせる。その格好は、齧齒類げつしるいというよりは私の猫に似ていて、私たちは二人して笑った。まだ信じられないままジュリーのことをもつと教えてくれるように頼むと、クリステインは私がジュリーとその父親に会えるようにとりはからってくれた。こうしてある土曜日の朝、モーニングサイド・パークのぶらんこのところで落ち合つて話すことができた。彼らの話はこの本の中にも登場する。しかし、地下のねぐらへつれていってほしいという私の頼みはことわられてしまった。

ホームレスの人たちと話をすることに、私は居心地の悪さを感じていた。高校や大学で慈善スーブの配給を手伝ったことはあつても、セントルイスから出てきた私には、ニューヨークのホームレスは荒つぱく思えた。私がコロンビア大学に在籍していた一九八九年から九〇年にかけて、街角で見かける彼らの数は三倍にも増えていたし、キャンパスの芝生でけんかをする姿は恐ろしかった。その頃ちようど同じ地域で、少女たちのグループが通行人を注射針で襲うという事件があり、その針がエイズ・ウィルスに汚染されているのではないかと皆をおびえさせていた。

その後二つの経験を通じて、私はホームレスと言葉を交わすことにそれほど抵抗を感じなくなった。コロンビア大学で同期の友人ロバート・メイタスは、路上で出会うこれらの人々にたいして、まったく偏見にとらわれずに接していた。彼はホームレスの人たちと挨拶がわりの抱擁さえかわすのだ。ロバートとそのバンド仲間とはときおり、ホームレスのために演奏会をひらいた。深夜のコロンビア大学本部棟の白い大階段、辺りを照らしだす白い月光の中に人々は集まった。また彼はその地域のホームレスの人々についての歌を、彼らのために作曲したりもしていた。彼を知ること、粗野で危険と思

っていた彼らにたいする私の恐怖は消えていった。

もう一つの出来事はより印象的だった。ある晩、ひどく取り乱した気持ちでアパートの部屋を出た私は、空き缶と古い衣類の詰まったゴミ袋を載せたショッピング・カートを押しているホームレスの女性と行き合った。お金を無心する彼女に私は、お金は持っていない、と答えた。彼女はごめんなさい、と微笑むと、私が泣いているのを見て、優しい、柔らかい目で私に助言を始め、しまいはゴミ袋の一つから萎れたカーネーションを取り出して手渡してくれた。気持ちの和らいだ私は、今度はただの物乞いでなく友達のように彼女に話しかけることができた。何日か前にアパートを失った彼女は、子供たちは友人のところに預け、自分は「空き缶と幸運を求めて」路上を歩き回っているということだった。この出来事以来、道端でホームレスに近づいて話をするのも、それほど怖いことではなくなった。

大学の近所のホームレスたちは、モグラびとについてのホラ話めいた噂は耳にしても、実際に会ったことはない、と言った。その夏、私は『ロサンジェルス・タイムズ』のニューヨーク支局で実習をしながら、調査を続けた。支局のそばのグランド・セントラル駅のホームレスの多くが、モグラびとを目にしたり、そのぬぐらに行ったことさえある、と証言した。何人かはトンネルの中へ私を案内してくれると約束したが、幸か不幸か実現はしなかった。彼らの一人が、近くにあるセント・アグネスのスーパ・キッチン（ホームレスのための炊き出し所）に行ったらいいと教えてくれた。私はそこに出向き、責任者と会って話を聞くことにした。

「噂は聞いたことがあるよ。その住みかまで行ったことがあるわけじゃないけど」はじめはそう言っていたが、話は次第に曖昧になってくる。「そういう人たちが実際にいるって断言しているわけじゃないんだ。いないって言っているわけでもないけど」それでも彼は、施設から一緒に歩いて出ながら、

グランド・セントラル駅のホームレス関係を担当している交通警察のブライアン・ヘンリー巡査部長をたずねるといい、とそつと教えてくれた。

ようやく見つけ出した、ブライアン・ヘンリー巡査部長のこぢんまりしたオフィスには、もう一人別の警官がいた。地下に住むホームレスについての記事を書きたいのだと私が説明すると、二人は笑った。「モグラびとのことかい。誰も地下になんか住んじやないよ。ただのホラ話だ」

ところが、同席していた警官が立ち去ると、ヘンリーは私が収集してきた話に真剣に聞き入った。何人かのホームレスが私を案内すると申し出た話をする、彼らの名前を尋ねさえる。それまでに聞き集めたトンネルのさまざまな場所での状況を説明していた時、女性の警官が入ってきた。彼女は明らかに驚いた様子で、ヘンリーにつめ寄った。「この人に話したのね、ヘンリー？　どうかしちやったの？」

ヘンリーは私と彼女を見比べると、顔を両手で覆い、机にのせた足を下ろした。さつと立ち上がると女性警官を部屋から追い出し、ドアを閉めた。

「オーケイ、こうなったら教えるよ。どでかい話さ。この街の地下にもう一つの都市があるんだ……」

ニューヨーク市とニューヨーク州は、年々増えるばかりの地下のホームレス人口に対応しきれていない。ヘンリーもまた、それにたいして憤りを感じている一人だった。現場の写真を撮り、知事に直談判しようとオルバニー（ニューヨーク州の州都）へ出向いていた彼は、この件に関しては今は口をつぐむように、いずれ救済対策をたてるつもりだからといわれた。が、救済の手はこなかった。

はじめ、『ロサンジェルス・タイムズ』はこの記事に乗り気ではなかった。私が大学を出たばかり

のヒョッコだったせいかもしれない。足を引っぱられているのさ、とある記者は笑い、べつの記者はトンネルに連れ込まれてレイプされるか殺されるかも、と心配した。

しかし何人かの記者、とりわけカレン・タマルティは、取材してみたら、と勧めてくれた。特に、私がJ・Cをオフィスに連れていつてからはさらに積極的にそう働きかけてくれた。ヘンリーが紹介してくれたこのJ・Cという人物は、グランド・セントラル駅地下の二百人のホームレス・コミュニティの自称スポークスマンだった。

カレンと編集者のロジャー・スミスは、このネタを追いつづけるように私を勇気づけてくれた。明らかに事態を把握しているはずの人々さえ、地下のホームレスは存在しないとそらぞらしく否定するのを目にして、私はますますやる気になった。数ヶ月の調査の後、ある匿名の手紙が届いた。それには、知的障害と薬物中毒の専門家のリストが同封されていた。彼らは、地下のホームレスの現状について話し合うために、これまでも何度か会合を開いていたのだった。話の糸はどんどんつながっていった。出会ったホームレスたちの温かさと親しみやすさ、そして独特のコミュニケーション・ネットワークを通じて彼らが連絡しあうやりかたに私はすっかり魅せられてしまった。道を歩けば、それ以前に私がインタビュしたホームレスたちや、私のことを噂に聞いたその仲間が声をかけてくれる。ある晩、ブルックリンの自宅へ帰るためにDトレイン（ハーレムからアップパー・ウエストサイド・ミッドタウンを抜けてブルックリンへ通じる地下鉄）を待っていると、ホームレスの男が近づいてきて、つぎの電車を見送ってそのつぎのに乗るようにと私に勧めた。「つぎの電車に乗ったらトラブルに巻きこまれるよ」という彼の言葉に従って、私は一電車見送った。その後、途中で止まったままの車内で、私が最初に乗ろうとしていた電車の中で撃ち合いがあった、と知らされた。

私の記事が『ロサンジェルス・タイムズ』の第一面に載るとすぐに、ホームレスをサポートする

人々からの電話が私のもとに殺到した。そのうちの幾人かは、私が彼らを引き合いにだしたことでたいそう腹を立てていた。「ホームレスの人々を地下に住む『モグラびと』と呼ぶことは、彼らを助けるどころか気味の悪いものみたいなイメージを植えつけることになるだけだ」

ニューヨーク最大のホームレス支援組織のある幹部は、編集者に連絡して、私の記事に彼の言葉の誤用があったとクレームをつけるつもりだ、と言った。嘘をつくつもりなの、と尋ねる私に彼は躊躇なく言った。「もちろん。ホームレスを助けるためなら嘘だつてつくさ」

私は本当に悪いことをしてしまったのだろうか、と考えたが、「あいつらのことは心配しないでいいよ」とバーナード・アイザックスは言ってくれた。ウエストサイドのトンネルに長いこと住んでいるアイザックスは、こうしたホームレスの支援グループにたいしてかなり批判的なのだ。「あいつらは市当局と同じくらい悪いんだよ。あっちにはあっちの、こっちにはこっちの思惑がある。あいつらは自分たちの組織で仕事を続けるための金が必要。寄付を集める口実のために、話をでっちあげるのさ。こっちは口実なんか要らない。俺たちに必要なのは真実なんだ」

こうして私は、本を書くために必要な情報を直接仕入れ、体験するためにトンネルの中へ戻ることにした。そしてバーナード、ヘンリー巡査部長やブレード(二十三章参照)のおかげで生涯続く人間関係をも築くことができた。そこで経験したことをもう一度経験したいとは思わない。悲しいことが多過ぎたし、つまるところ、同じことを繰り返すには自分自身の身の危険が大き過ぎる。トンネルで出会った友人のあまりにも多くが死んでしまったり、ほとんど見分けのつかないほどに心身ともにひどい状態になってしまった。ふたたび地上へ帰ってくることできた者はあまりにも少ない。危険な地下のトンネルの冒険を楽しみにしていられたのは、トンネルに住む人々と実際に出会い、彼らの現状にふれるまでの短い間だけなのだ。

地下の危険な世界でのホームレス一人ひとりの物語だけでなく、その暗い世界にとる灯のような友情と支えあいに目を向けて欲しい。本書には、トンネルでのホームレスたちの生活やそのコミュニケーション・ネットワークだけでなく、行政機関との衝突、あるいは救済プログラムや非営利援助グループのことなども登場する。これら個々の事実を通して、彼らと出会ったことのない人々が地下のホームレスについての真実をあるがままに受け入れ、理解する助けになればと願っている。

本人たちの希望により、本書に登場するホームレスの名前の多くは仮名である。「自分の過去やあやまちと一緒に地上での名前とおさらばしたんだ」とペンシルベニア駅（ペン）の地下コミュニティの自称「市長」は言う。通り名だけを教えてくれたり、何か偽名を考えてくれと私に頼んだりする一方で、彼ら全員が自分たちの人生についてすすんで語ってくれた。そうすることで彼らについての一般の理解が深まり、仲間の助けになればと考えることである。彼らはニューヨーク・シティの底辺で暮らしている。しかし彼らの生活の中には、ニューヨークでも最高の何かがある。これは、そんな彼らの物語だ。

## 一　ねぐらを探して

男も、そのトンネルのことは耳にしていた。そこで数ヶ月前に見つかった死体のことも。

肉の食い尽くされた頬にたかったウジムシとハエ。残った顔の半分には、ネズミの小さな歯形がいくつもついている。ぼつかりと空いた眼窩がんかには太いウジムシが這い、恐怖に見開かれたもう一方の眼がこちらをじっと見ていた。その光景にはベテランの警官も嘔吐したほどだという。この辺りではよく見かける顔だが誰も素姓を知らない、そんなホームレスの一人だ。住みかも行かぬ男だった。解剖室などに連れていかれるのはまっぴらだ。死体になってしまった今も、そう言っているのかのようだった。死後まだ二、三日のはずだったが、死因をつきとめるのは不可能なほど腐敗がすすんでいた。もつとも、誰か死因をつきとめようとする人間がいればの話だったが。

強盗にあつて殺されたか、錯乱した薬物中毒者に襲われたか、あるいは自然死か……つまり路上で暮らす、疲れ果てた五十歳の男に起こりうる類いの自然死か。どっちにしても死因なんてどうでもよかった。涙を流す人間も、死体を引き取りに来る人間もいなかったから。あとに残されたのは、ライカーズ島刑務所の囚人たちによるアイランド墓地への埋葬、政府の支給する死体番号、そしてその醜悪な死体にまつわる、ホームレス仲間の噂話だけだった。